



Title	グローバルの観点から長期滞在外国人の生命を問う
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪公衆衛生. 2019, 90, p. 17-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

グローバルの観点から長期滞在外国人の生命を問う

林田 雅至

大阪大学COデザインセンター「社会イノベーション部門」教授

多言語コミュニケーションデザイナー、リスボン科学アカデミー(文系部門)会員

I. 外国語＝日本語教育における基礎的双方 向運用能力 (interactive competence) の不可欠性

日本語学校の学習に求めるもの

附録1にある、双方向外国語運用能力を基礎として実践する「健康管理通訳」について所謂「通訳」で言われる「足しても引いても」駄目であるという原則論は、「健康管理通訳」には通用しない。外国人患者の気持ちを斟酌し、また日本人医療者の説明を噛み砕いて、外国人の母語文化的背景などを考慮し、「言い換える」必要がある。この「言い換える」ことのヒントは、民話研究概念の「移し替える (transfer)」にある。

例えば、普遍的な概念で「小さい者が大きい者をやっつける」などという民話は世界中にある。御伽草子(17世紀中葉～18世紀前半)に見える、一寸法師桃太郎、浦島太郎、物ぐさ太郎、酒顛(呑)童子など。応仁の乱の頃圧政に苦しむ庶民がそうした民話を通して溜飲を下げたとされる。アフリカの素早く走るウサギや、ブラジルのサッシペレという黒人片足少年、イベリア半島の世知に長けた女性セレスティーナも同様に既成概念を打ち破る力を秘めている。

日本語学習において、外国人生徒に、学習者の言語文化的背景、多様性を知って、基礎的な「双方向外国語運用能力」を身に付けさせることが大切である。

II. 日本語学校におけるステークホルダーの 育成

母語と学習外国語の橋渡しのための学習

日本語学習において、一方的に日本語日本文化を教えるのではなく、彼らの母語・母文化を日本語・日本文化に「移し替える」「言い換える」橋渡しをする術を高度な「通訳技術」「健康管理通訳」のレベルではなく、基本的で、簡単なレベルから丁寧に教えるという姿勢が必要である。

基礎的なinteractive competence(双方向外国語運用能力)を身に付けると、一方的にパンプラクティスで覚える紋切り型の日本語による発話ご

とに抱える「ストレス」を緩和する効果が発揮される。

「日本語ではこう言うんだ」という断定的な言い方は控えるのが望ましい。

さて、そうしたinteractive competenceを習得する学習過程で、学習者母数から5%程度、耳のよい言語センスの優れた受講者が現われる。20名クラスなら1名、40名規模で2名になる。そうした「口を楽器」のように駆使できる母語話者を取り出して、双方向外国語運用能力を一層鍛えることを勧める。外国人生徒のステークホルダーとして育て、患者生徒と医療者の「橋渡し」役を演じてもらい、あらかじめ近隣病院や保健所の医療者の協力を得て、指導を仰ぐことである。勿論、そうした俄か「健康管理通訳者」だけに依存することなく、並行して医療機関側などは「健康管理通訳」人材の育成支援にも尽力し、二段構えで外国人生徒の健康維持・病氣回復に対応するべきである。

公益財団法人・大阪公衆衛生協会主催、大阪大学COデザインセンター共催JICA関西後援「適正テスト」に関して、「移し替える」「言い換える」通訳能力の第三者チェック機関として、「適正テスト」健康管理通訳多言語版の作成を進めている。

III. 附録1：健康管理通訳人材の育成 ISO健康管理通訳の規格化

ISO健康管理通訳の規格化は2019年度に発行される見込みである。従来の「医療通訳」にいったん「健康管理」が加えられ、その後、「医療」という文言は削除された。本来公共サービスを前提とする規格化において、その内容がタイトルに明確化されたと言える。この場合Health Careの含意はGlobal Public Health Careとなる。つまり、意識すれば、地球市民の健康(衛生)管理である。

Medical Linguistics Innovation

外国語学習は学習言語・文化への適応(同化)・統合するものと歴史的に位置付けられる。現在のGlobal EnglishやGlobal Chineseも同様である。

ISO「健康管理通訳 (Health Care Interpreting)」の規格化に伴い林田はMedical Linguistics Innovationを提唱している。外国語教育・学習を相対化し、媒介語＝学習者母語・文化の重要性を強調し、Contextual Sensitivityに基づく「双方向性運用能力 (interactive competence)」の涵養に力点を置いている。

抽象概念の理解の不可欠性

この難関の課題をいかに克服するか「健康管理通訳」養成のポイントがある。

まずCEFR・B2以上の能力が求められる理由は、抽象概念の理解の不可欠性にある。それは何を意味するかと言えば、invisibleな内容（患者・家族などの感情的な微妙なニュアンス、あるいは医療従事者の治療上のデリケートな説明）を学習言語で把握できるということで、欧州言語共通参照枠基準のB1 (visibleで具体的な内容理解) からすれば、ハードルは格段に上がっている。

母語と学習外国語の橋渡し作業

学習者母語による母語・文化の抽象的概念の理解は暗黙の了解ではある。けれども、一般的にSNSなどの急速な普及で日本人の母語＝日本語の傾聴力、理解力が、非常に低下し、危機的な状況にあると言ってよい。実はそれは世界的な現象でもある。

医療通訳者、否、健康管理通訳者になろうという志の高い人にそのような懸念を抱く必要はないと思われるが、通訳学習において、まず母語による傾聴理解力を確認し、鍛える必要がある。その上で、その内容を外国語・文化に通訳・翻訳し、「橋渡し」する。これが第一義的に求められる。

具体的に言えば、学習外国語から日本語への通訳・翻訳する能力と日本語から学習外国語への通訳・翻訳する能力をバランスよく、正確に身に付けることが求められる。

「橋渡し」は、学習者自身の自助努力にかかってくるとともに、そこに本人の両言語におけるContextual Sensitivity (文脈を汲み取る感受性) の良し悪しが大いに関わってくる。直感力とも言えるし、勘の良さとも言える。努力も必要であるが、両言語における言語的センスが問われることになる。「口は楽器」であり、Oral Athleteと言えそうである。われわれが、interactive competenceを問う「適正テスト」を実施する根拠はここにある：

SDGs「適正テスト」(第1回：2018. 7. 14；第2回：2019. 2. 16)：

http://kansai-sdgs-platform.jp/cat_event/413/
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000521.php>

<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/seminar/2019/02/8032>

http://kansai-sdgs-platform.jp/cat_event/914/

Ⅳ. 附録2：外国語教育概論など 2,000時間を超える外国語学習時間

従来「双方向外国語運用能力」は所謂「バイリンガル話者」でなければ、無理ではないかと思われてきた。しかし、CEFRによる能力(熟達度)別レベルが設定され、6段階の「中上級」にあたるB2以上にになればinteractiveでdeductive(演繹的、応用の効く)なレベルまで達し、Contextual Sensitivity(文脈を汲み取る感性)に拠って、しかるべき訓練を重ねて「双方向外国語運用能力」は担保される。因みに、日本の大学設置審基準の「義務的」学習時間で、予・復習を含む約2,000時間(4年間)を超える実践的な「外国語学習」によって、学習者母数の5%ほどが「双方向外国語運用能力」に達するとされる。

下記表において、ロシア旧東欧圏東洋学部日本語科の例を示して、日本の学習時間と比較する意味で、対照させたが、個別に訊いてみると、自習時間はもっとやっていると言われた。ここでは、言語習得の基準参照値として6,750時間としているが、これは具体的に何を意味するかと言えば、関西空港に到着した留学生が、飛行機のタラップを降りたところから、流暢な日本語発話がなされ、書き言葉の漢字知識も相当学習済みであるという状態である。現代日本語・文化事情に関して、半年ほど予備教育を経て、大学院修士課程へ進学するイメージである。因みに、日本で中高6年間で

	授業時間	自習時間(大学設置基準など)	修了単位要件総学習時間数	留学による学習4,800時間加算(1日16時間言語シャワー×300日)
日本の外国語学部系(4年間)：1コマ×2h 上記基準：1コマ×1.5h	900	1,800 675(7.5h×4y×15回)	2,700 1,350(授業時間数×2倍)	7,500 6,825
ロシア旧東欧圏東洋学部日本語科(5年間)	2,250 (20h×5y×15回)	4,500(授業時間数×2倍)	6,750(言語習得基準参照値)	留学なし
欧州CEFR 国際認定試験(上級) ALTE - The Association of Language Teachers of Europe (現在27言語)	900	1,800	2,700	7,500 CEFR: Common European Framework of Reference for Languages (B2-C2)(国語共通参照値)
ドイツへの移居に課せられる社会的統合(「言語学習」CEFR中級)	600	1,200	1,800	6,600(みなし留学) LATE https://late.europa.eu/home (European Union Terminology: 欧州並言語翻訳サイト26言語)
小学校～大学までの英語学習	736.4	1472.8	2,209.2	7,009.2
中等教育課程(英語)	628.4	1,256.8	1,885.2	6,685.2
日本の大学英文科(4年)	900 675	1,800 1,350	2,700 2,025	9,385.2(+6,685.2) 8,710.2(+6,685.2)

コミュニケーション能力が乏しいと批判され、一気に成績評価も伴うキッズイングリッシュの拙速な導入に至っているが、ここに示した中等教育課程（英語）の時間数は最も学習時間が費やされる所謂進学校の場合を参考としているが、一般的には、1,500～1,600時間未満である。上記の通り2,000時間以下であり、数字の上で、発話にまで至るとは考えにくいのである。母語形成獲得期が11～12歳であり、それまでに、英語教育の導入で、二言語学習（習得）を強いるのは、かなりの無理があると思われる。二言語が不十分に習得される（最悪の場合はダブルリミテッド〔二言語制約〕）懸念があることを指摘しておきたい。急がずとも、18歳からでも外国語学習時間をきちんと担保すれば、必ず身に付くのである。

V. まとめ

本拙稿は、平成30年度 ストップ結核パートナーシップ関西、第6回 ワークショップ、テーマ：「長期滞在外国人の結核対策」（2019.1.26；13：30～17：30）の中で、提言として同題で発表した内容をまとめたものである。

提言では、日本語学校にターゲットを絞って、健康保険証発行までの「3か月」を待たずに、来日直後健康診断（結核検診）を徹底し、可能な限り、学校で朝食を無償提供し、学校内、同一語圏内の生徒の中から、20～40名クラスサイズで必ず1～2名存在する「口を楽器」のように操る耳のよい生徒を選出し、日本語・当該言語の「双方向運用力」を身に付けさせるように鍛え、学校内の彼ら同一語圏グループの支援リーダー（ステークホルダー）として育成し、当該グループ、学校と医療機関（病院、クリニック、保健所など）との繋ぎ役を演じさせるシステムを構築することを中央政府に対しても、また大阪府・大阪市に対しても提案した。

各学校を「健康（衛生）管理」の現場と捉え、彼らの健康・衛生環境を守り、ひいては、日本社会の健康（衛生）管理に繋がると考える。そうした支援リーダー（ステークホルダー）にも上記「適正テスト」多言語版を受検させ、ISO13611:2014「コミュニティ通訳」（発行済）資格を付与したい。目下、ISO認証機関の指定を受ける日本の窓口一般社団法人「日本規格協会」に申請中である。

また、2月8日G20学内語学選抜で上記「適正テスト」（日英、英日版：総点評価基準はGPAに準拠、双方向性検証得点差は日英訳得点と英日訳得点の差）を実施したが、バイリンガル受検者でも、AA（左は総点80点以上；右得点差Aは2.5点

以上5.0点未満）になり、SS（総点Sは90点以上、得点差2.5点未満）、SAという「最高ランク」には入らず、一人は、留学経験がないにもかかわらず、通常の中高・英語教育と、今年度interactive competenceを涵養する授業受講で、そのバイリンガル話者と総点も得点差も遜色なしという結果となり、一方、この学生と言語学習歴が変わらず、所謂外国語検定試験は高得点同ランクであるのに、今回BD（総点Bは70点以上79点以下、得点差Dは10点以上）評価になった。ただ、こうした結果を見て、「適正テスト」は、既成の外国語検定試験で測れない実質的な「言語習得履歴とその双方向運用能力」を知る手立てとして有効な手段であると自信を深めたのである。

参考資料：

御伽草子（17世紀中葉～18世紀前半）：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A1%E4%BC%BD%E8%8D%89%E5%AD%90>

山口昌男著「アフリカの神話的世界」（岩波新書、1971年）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E5%8F%A3%E6%98%8C%E7%94%B7>

<https://bookmeter.com/books/138030>

Saci-pererê：

[https://en.wikipedia.org/wiki/Saci_\(Brazilian_folklore\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Saci_(Brazilian_folklore))

La Celestina（1499）：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%82%BB%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%8A>

小間使いの日記（1900）：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E9%96%93%E4%BD%BF%E3%81%AE%E6%97%A5%E8%A8%98>

ルイス・ブニエル監督作品（1964）：同上小説映画化

あらすじ・解説：

<https://filmarks.com/movies/31176>

ダブルリミテッド：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E8%A8%80%E8%AA%9E>

<https://www.philanthropy.or.jp/magazine/365/shibasaki.pdf>

履修評価制度GPA（Grade Point Average）：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/GPA>